

思いをはぐくみ，表現力を高める授業づくり

—小 5 年 図画工作科 「顔・かお・カオ」「アート？アート！」の実践を通して—

目 次

はじめに	・・・・・・・・ 1
1 子供のかかわり合う授業をつくる	・・・・・・・・ 2
(1) 子供たちの姿から	
(2) 目指したい子供たちの姿とは	
ア 身に付けさせたい四つの力	
イ 四つの力を付けるために —授業改善の視点—	・・・・・・・・ 3
(3) 題材と配列の工夫 —年間指導計画—	
2 実践 —INPUTと意見交換を取り入れた授業—	・・・・・・・・ 4
(1) 『顔・かお・カオ』	
ア 題材との出会わせ方 —授業改善①INPUT—	
イ 思いをはぐくみ，表現力を高めるための支援	
—授業改善②ショートステップの設定—	・・・・・・・・ 5
ウ 本時（1・2／5）の指導計画	・・・・・・・・ 6
エ ショートステップでのかかわりから子供の成長を見取る	
(2) 『アート？アート！』	
ア 題材との出会わせ方	
—授業改善①INPUTと模倣—	・・・・・・・・ 7
イ 思いをはぐくみ，表現力を高めるための支援	
—授業改善②意見交換・かかわり合いの場の設定—	・・・・・・・・ 8
ウ かかわり合いを分析することで子供の成長を見取る	・・・・・・・・ 9
3 成果と課題	・・・・・・・・ 13
(1) 成果	
(2) 課題	・・・・・・・・ 14
おわりに	・・・・・・・・ 15
実践 1 資料 5 年 1 組 図画工作科学習指導案	・・・・・・・・ 16
実践 2 資料 5 年 1 組 図画工作科学習指導案	・・・・・・・・ 18

思いをはぐくみ、表現力を高める授業づくり

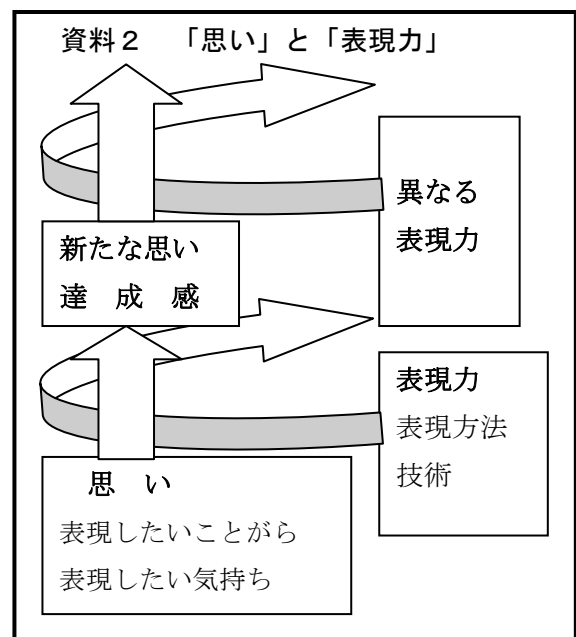
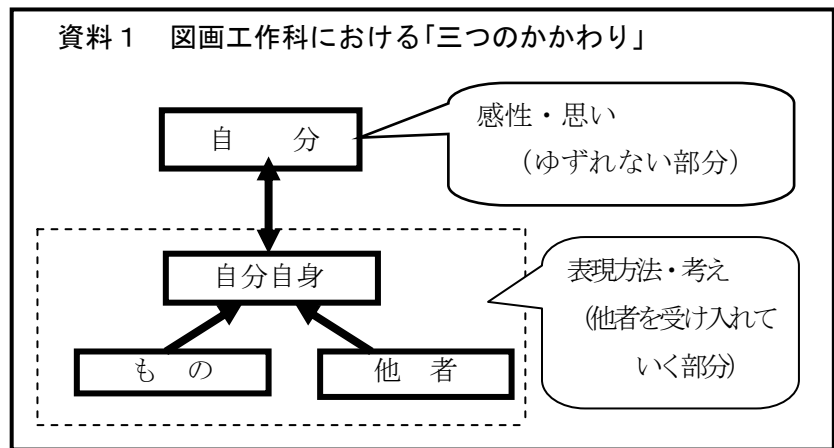
— 小5年図画工作科 「顔・かお・カオ」「アート?アート!」の実践を通して —

はじめに

絵を描くこと、工作をすること、造形遊びをすること。図画工作（以下は図工と表記）は「もの」とかかわって、「もの」をつくりあげる教科である。しかし、実際の制作では、友達の作品から刺激を受けたり、友達や教師と意見を交わしたりすることも作品づくりのヒントになっている。また「もの」とのかかわりを通して自分自身を見つめ直すこともできる。このように図工の授業は、子供たちが「もの・他者（友達）・自分自身」とかかわりながら進められている。自分の好きな形や色で思いのままに表現するだけなら、他者とかかわる必要はない。しかし、つくりだす喜びを味わうだけでなく造形的な創造活動の基礎的な能力を育てたり、豊かな情操を養ったりするためには、自分以外の表現方法やそのよさに触れる必要がある。学校教育の中で図工が存在する意義は、ここにある。自分の目や耳を通して他者の作品を見たり、他者の思いを聞いたりすることで、もう一度自分の思いや作品を振り返ることができる。つまり、自分の中の感性や思い(ゆずれない部分)と表現方法や考え(他者を受け入れて変わっていく部分)を確かめることができるのである。図工の授業では、教師がこの二つの部分を意識した上

で、「もの・他者・自分自身」とかかわらせていく工夫をすることが大切である(資料1)。

資料2にあるように、図工における「思い」とは、「子供が表現したいと思うことがらや気持ち」である。「思い」と「表現力」が互いに影響し合うことで、よりよい表現が生まれるのである。たとえ表現方法や技術を教えて表現力だけを高めてもよい作品はできない。思いをはぐくむことによって「描きたい・つくりたい」という気持ちが高まり、そこに表現するために必要な技術や方法が加わって、思いを形にすることができたとき、子供たちは達成感を味わうのである。また、そこで得た達成感や満足感は、子供たちの思いを更にはぐくんでいく。このように「思いをはぐくむこと」を重視しつつ、両者が互いに影響し合うように授業を進めることが大切と考える。



1 子供のかかわり合う授業をつくる

(1) 子供たちの姿から

「自分で菜の花を採って、自分のつくった色で自分の絵を描きました。一人一人違って、すごくオリジナルっぽく見えた。たくさんあった花の中でも一輪だけの自分の花を探し出せた」これは、5年生の児童Aが4月の最初の図工の時間で、菜の花を描いたときの日記である。

高学年で図工の授業を行うと「これでいい?」、と教師に確認をとりながら作業を進める子供や周りをきょろきょろと見回し、なかなか制作に取り掛かれない子供に出会う。低学年では授業だけでは時間が足らずに、休み時間等に絵を描いたり粘土遊びをしたりする子供も少なくない。しかし、学年が進むにつれて、子供たちの中に描きたい・つくりたいという思いよりも、うまく描かねばならない・周りから見て褒められるような作品がよい作品だという感覚が勝っていくように感じる。

本実践を通して、表現にはいろいろな表現方法があり、これが正しいという色や形などないことや、人それぞれ感じ方や表現の方法に違いがあることを、そして何よりも自分の強い思いが大切であることを子供たちに伝えたいと考えた。

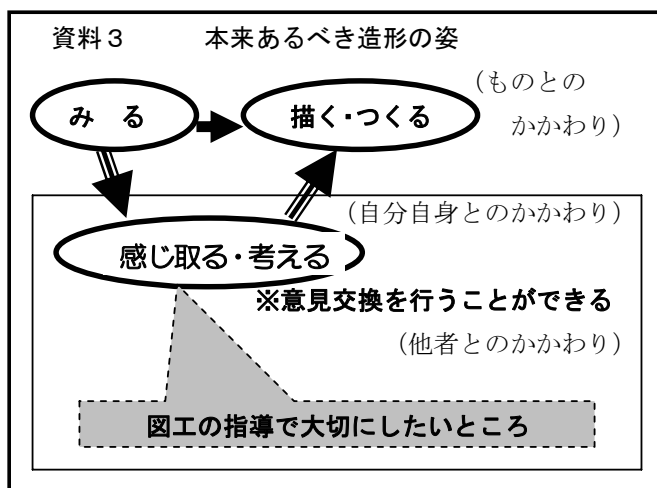
(2) 目指したい子供たちの姿とは

ア 身に付けさせたい四つの力

図工の授業を通して、子供たちに自らつくりだす喜びを感じさせたい。周りからどう評価されるのではなく、自分らしい造形的な試みを楽しみ、それぞれの思いや作品について、仲間と互いに認め合える雰囲気をつくりたい。そのためには、次のような力が必要であると考えます。

- ① 新しい発想を生み出す力
- ② 表したいものを表現する力
- ③ 材料の特徴をとらえ表し方を工夫する力
- ④ 作品からよさや美しさを感じ取る力

図工では、子供たちが心を開き、楽しんでものをつくるのが大切である。しかし、描きたいものやつくりたいものがいつもはっきりしているわけではない。うまくつくりたいという思いはあっても表現できずに困っている場合もある。子供のもっている思いを引き出し、さらにその思いが高められるようにするためには、前述の四つの力の育成を欠くことができないと考える。②の表現する力を育てるためには、様々な表現方法を教師から示すことも重要であると考えます。それらの表現方法を用いることで満足いく作品をつくることができれば、更に新しい発想が生まれたり（①発想力）、表し方を工夫したり（③表現を工夫する力）するであろう。この発想力や表し方を工夫する力は、他者とかわることで更に伸ばすことができる。うまく表現できないときに、友達作品や言葉からヒントを得たり、はっきりとイメージできなかったことを実感としてとらえたりできる。このように図工の指導では「見たもの」を「かたちに表す（描く・つくる）」間に「感じ取る・考える」というステップを入れることが大切である。一人一人が感じ取ったり考えたりしたもの



を意見交換することで、いろいろな感じ方やものの見方に気付くことができる。その中から自分の感性に合うものを選び具現化していく主体的な学びが本来の造形の姿である。また、ものづくりを通して満足感や達成感を味わい、友達と意見交換する中で自己肯定感を感じることが、図工の目標の一つである豊かな情操を養うことに結び付くと考える。

イ 四つの力を付けるために —授業改善の視点—

子供たちは、幼いころから何となくものをつくりたり絵を描いたりしているが、様々な表現方法や技術を学んだ経験は少ない。経験のないところから新たな発想や豊かな表現は生まれにくい。子供たちの思いをはぐくみ自由に表現させるためには、まず子供たちに対し、たくさん「INPUT」をすべきだと考えた。

① **INPUT**⇒子供たちにイメージをもつきっかけを与えたり、いろいろな表現方法に触れさせたりすること。制作の前に美術作品を鑑賞する題材や、表現方法や技術をトレーニングする題材を設けることを指す。

なお、鑑賞したり技術を学んだりして個々に「INPUT」するだけでなく、互いに感じたことを話し合うことも「INPUT」の大切な要素であると考え、制作過程で意見交換の場を設けた授業を行うことにした。

② **意見交換**⇒制作の途中で互いの作品について、アドバイスし合ったり話し合ったりすること。互いに自由に制作の様子を見合ったり、幾つかの作品を取り上げて話し合いを行ったりすることを指す。

制作前に「INPUT」を行い、制作過程で「意見交換」の場を設けることにより、子供たちの制作意欲を高め、作品の質も高めることができると考えた。目指す四つの力を付けるために、年間指導計画に「INPUT」の題材を組み込むこと、各題材の学習の流れに「意見交換」の場を設けることの2点を意識した。

(3) 題材と配列の工夫

—年間指導計画—

子供たちの姿と授業改善の視点を基に年間指導計画を作成した。

まず『自分の色でI～菜の花～』の題材を設定した。児童Aが日記で、一人一人作品が違うことを新鮮に感じていることから、こうした題材を年度当初に実践する必要性を改めて感じた。

そこで4・5月に『自分の色でI～菜の花～』『自分の感じたこ

月	題 材	配時	
4	自分の色でI 絵	世界に1本だけの菜の花	2
	自分の感じたことを大切に 鑑賞・絵	よく見てみると【INPUT】	1
5	自分の色でII	さかさま まさか	2
	造形遊び・絵	色遊び【INPUT】	1
6	動くよ動く 絵が動く 工作	今のぼく・わたし	2
		アニメーションボックス、くるくるマンガ、ぺらぺらマンガ(選択)	5
7	曲げてねじって 鑑賞・立体	顔・かお・カオ【INPUT】	1
		粘土の顔	2
9	アート?アート! 鑑賞・工作	ええっ?絵!?【INPUT】	1
		糸のこドライブ(関連 とよた子ども造形フェスティバル)	8
10	こんなとき感じることを思うこと 絵	楽しかった キャンプ(関連 野外学習)	2
	心広がる場面 絵	大好きな本のあの場面…(関連 国語)	4
11	光とかげ 造形遊び	光を当てると…	4

とを大切に～さかさま まさか
～』 『自分の色でⅡ～今のぼ
く・わたし～』の三つの題材を
設定し、一人一人違っているこ
とが当たり前だということを繰
り返し体験できるようにした。
前述の児童Aの日記を学級通信
に載せ「みんな顔が違うように、
考えることも描く絵も違う。み
んな違うからすてきなんだよ
ね」と子供たちに投げ掛けた。

12	ゲームを作ろう 工作	対決！3目ならべ	4
1	ほって刷って 鑑賞・絵	日本のアート【INPUT】	1
		1版多色刷りに挑戦！	6
2	広がれアート 造形遊び	6年生を送ろう (関連 総合学習)	2
		1年を振り返ろう 作品集づくり	2
3	鑑賞		

☆H17年度は、この年間指導計画で行った。

☆H18年度は、『世界に1本だけの菜の花』と『色遊び』をカッ
トし、代わりに4月に『作品で自己紹介をしよう』を行った。

その後、鑑賞題材『自分の感じたことを大切に』で、教科書の《シマウマだけドウサギ》について意見交換を行った。緑と白だけシマウマに見える、シマウマのシマがウサギになっている、しっぽや足先の細かいところもウサギだ、色が青から緑へと順に変わっていくなど、同じ絵を見ているのに一人一人気付くことは異なっており、全員が発言することができた。一つの作品に対してたくさんの見方ができることを実感した子供たちは、鑑賞を基につくった『さかさま まさか』の作品を見合った後にこんな日記を書いた。「みんな工夫したやり方があって、個性や工夫にあふれていました。みんなのをまねしたい。みんなすごーい！」(児童B)、子供たちの中に、少しずつ人と違うことを楽しむ雰囲気生まれてきた。次の題材『今のぼく・わたし』では「今まで描いた顔の中で自分ではうまくいったと思う」(児童C)、「最初うまくいかなかった、裏に描いたら自分じゃないようになってしまった。また表にして裏にして表にして、やっといい絵が描けた。満足できる絵になった。ヤッホー！」(児童D)、「にじんだら失敗って思ってたけど、にじんだのもいい感じになった」(児童E)と、自分がどう作品に取り組んだかが、子供たちの中で大きなウエイトを占めるようになってきた。人と比べ「あの子は自分よりもうまいな」「うまくいかなかった」という自分を否定していく表現活動ではなく、題材の配列を工夫することによって、「こんなことができた」「よし、ここはうまくいった」という満足感や達成感のある表現活動の基礎ができたと感じた。そこで、更にいろいろな表現方法に触れ、見方や感じ方の幅を広げたいと考え、次に『顔・かお・カオ』、『アート？アート!』の実践を計画した。

2 実践—INPUTと意見交換を取り入れた授業—

(1) 『顔・かお・カオ』

ア 題材との出会わせ方 —授業改善①INPUT—

今まで、作品をつくった後に互いに見合うというかたちで鑑賞を行うことが多かった。しかし、4月題材『自分の感じたことを大切に』では、先に教科書の《シマウマだけドウサギ》の鑑賞を行ってから、題材『さかさま まさか』で表現活動を行った。その結果は、子供たちのつくる意欲が高まり、できあがった作品も豊かな発想の質の高いものが多かった。これまで作品をつくりあげるといふ「OUTPUT」の作業を中心に目を向けてきたが、表現活動の前に子供たちの発想を豊かにするための「INPUT」の場を設定することによって、表現がより

資料5 学習の流れ

次	時	主な学習内容
1	1	顔をモチーフにした作品を鑑賞する。【INPUT】
2	2	紙で試作をし、話し合
	3	う。【意見交換】 粘土を曲げたりねじったりして顔をつくる。

☆紙での試作はH17年度の反省に基づきH18年度のみ行った。

☆土粘土のため、鑑賞は後日行う。

よくなることが分かった。そこで、子供たちの思いが
つなげていくことをねらいとし、**指導過程を【美術作品
の鑑賞→作品制作→互いの作品の鑑賞】**とした。

『曲げてねじって～粘土の顔～』では、いきなり粘土
に触れるのではなく、まず『顔・かお・カオ』の鑑賞の
授業を行ってから、粘土作品の制作を行った。5月に
『今のぼく・わたし』の題材に取り組み、自分の顔をよく

見て、形と位置に着目して鉛筆で自画像を描いた。今までなんとなく見ていた自分の顔をじっくり見
つめることで、目の横をたどっていくと耳の付け根になることや、顔は左右対称ではないこと、首は
思っているよりも太く顔と同じような太さでつながっていることなど、多くのことに改めて気付くこ
とができた。しかし、見たままを表現するにとどまらず、自分なりの思いを自由に表現することを学
ばせたい。そのために、よく見て表す方法とは別に「自分の感じたものをより強く表現するために本
来の形を変形したり強調したりする」方法（デフォルメ）もあることに気付かせたいと考えた。

そこで『顔・かお・カオ』では、同じように顔を取り上げたパブロ・ピカソの《顔》（最後の自画像）・
《泣く女》パブロ・ガルガーリョの《キキ・ド・モンパルナスのマスク》の3点の美術作品を鑑賞し
た。パブロ・ピカソの《顔》では、青い顔の色、大きな目や耳が描いてないなどの顔のバランスが崩れ
ていることに着目させたい。《泣く女》では、まるで仮面を着けたような不思議な構成と色彩の顔にピ
カソの怒りや悲しみが表れていることに気付かせたい。同じ作者なのに全く違う表現をしていること
や、形や色を変えたり強調したりすることで作者の思いを表そうとしていることをINPUTする。
また、《キキ・ド・モンパルナスのマスク》では、ピカソの2作品と同様にデフォルメされていること
の他に、絵画ではない凹凸を利用した半立体の表現の面白さや、曲げたり
ひねったりすることで生まれる空間の面白さにも気付かせたい。最後
に半立体の作品を鑑賞するのは、次時の板状の粘土を使った『粘土の顔』
へと意識をつなげる意図がある。

これらの鑑賞による仲間からのINPUTの活動を行うことによって、
今までもっていた「顔」の概念やイメージを揺さぶることができ、顔は
必ずしも丸くなくてよいととらえる子供が多ければ、INPUTの効果
はあったと考えられる。また、粘土はちぎったりくっつけたりするもの
というイメージが強い。しかし、本題材では、目や鼻のパーツをつくっ
てくっつけるという今までの方法を用いてつくるのではなく、曲げたり
ひねったりしてつくるという新たな条件の下で、表現方法を工夫させた

い。本題材の素材が紙粘土や油粘土ではなく、あえて土粘土とした理由は、土粘土の手触りのよさや
土をひねったりつまんだりすることで形をつくっていく楽しさを味わわせたいからである。今回の制
作において、鑑賞で得た表現方法（デフォルメ）を思い出して作品に生かすことができれば、INP
UTによる効果があったと考えることができる。

資料6
《顔》
パブロ・ピカソ作
秀学社 出版
「美術資料」より

資料7
《泣く女》
パブロ・ピカソ作
秀学社 出版
「美術資料」より

資料8
《キキ・ド・
モンパルナスのマスク》
パブロ・ガルガーリョ作
朝日新聞社 出版
「美術館を楽しむNo.22
大塚国際美術館」より

イ 思いをはぐくみ、表現力を高めるための支援 —授業改善②ショートステップの設定—

子供たちは『顔・かお・カオ』の鑑賞を通して意見交換を行うことで、一枚の絵に対していろいろ
な感じ方や見方があることに気付くであろう。平成17年度の実践では、こうした人とのかかわり合う
場を設けた後すぐに粘土の制作に入った。鑑賞では、子供たちの感性は素晴らしく、《泣く女》に対し

て「悲しそう」「悔しそう」「閉じ込められた感じ」「お葬式」といった言葉が出された。ピカソのゲルニカ空爆に対する怒りと悲しみを、子供たちは作品を通じて感じていたのである。この鑑賞を通して子供たちは、自分の思いを表現するために、形や色を強調したり変えたりする方法（デフォルメ）があることを学んだ。しかし、それを作品にそのまま生かすことは難しく、四角い板状の粘土を顔の形に切り取ってしまったり、粘土を前になかなか手が出せなかったりする子供が見られた。

そこで18年度は、更にもう一段階、試作品をつくり互いに見合うという場を設けた後、粘土での制作に取り組むことにした。材料の粘土と同じ大きさの画用紙を使って、顔の試作品をつくる。それを互いに見合い、よさや面白いところについて意見交換を行う。試作過程の段階で他者と積極的にかかわる場を設定することで、イメージのもてない子供や表現に自信のもてない子供は安心して作品に取り組むことができると考えた。INPUTとOUTPUTをつなぐ試作段階で意見交換を行い、考えたり感じ取ったりする幅を広げるショートステップを設けることは、制作意欲を高め作品の質も高めることに結び付くと考える。

ウ 本時(1・2/5)の指導計画

(ア) 本時の目標

- ・鑑賞作品や友達の作品のよさや面白さを、進んで発表する。
- ・**紙を切ったり丸めたり折ったりして、構想を膨らませる。【H17年度の反省を基に改善した点】**
- ・粘土と同じ大きさの紙を使って、曲げたりねじったりする方法を試す。
- ・顔をモチーフにした作品を鑑賞し、様々な表現方法に触れ、そのよさや面白さを味わう。

(イ) 手だて

- ・1時間目の鑑賞では、机を取り除き、できるだけ作品に近づいて作品や仲間の考えにかかわり合えるように配慮した。3点の美術作品をボードにはり付け、子供たちに提示する。
- ・2時間目の試作では、個々に取り組ませるため各自の机で活動した後、互いに見合う時間を設定する。

エ ショートステップでのかかわりから子供の成長を見取る

資料9 試作後の感想

- ・みんなの技術を見習って、イメージどおり作れた。(C4)
- ・すごくうまくできて、友達がアドバイスをいっぱいしてくれました。(A3)
- ・D2のを見て、完全に切らずにぴらぴらしてあるのをまねしたら、ちょっとうまくいきました。(C1)
- ・耳のつくりかたで悩んでいて、B3を見に行き行って耳のアドバイスを聞いてつくってみたらじょうずになったよ。(H4)
- ・A3を見たら丸(の形の顔)でした。ぼくはイメージが浮かばなかったから、A3と似ているものをつくったよ。(D1)
- ・楽しかった。面白いといわれたよ。(G1)
- ・いいアイデアだねと言われて、うれしいです。(C3)
- ・めくってねじることを新しく覚えたし、みんなのを見てすごいなあと思った。(D4)
- ・今日の授業はいろんなことを考えて面白かった。頭の中がたくさんになるくらい、いろんな考えが浮かびました。(F4)

(フ) 人とかかわる場

互いの作品を見合うことで刺激を受け合っている様子が感想(資料9)から分かる。当初は紙での試作を行った後に小グループで作品を見合う予定であったが、子供たちの制作に対する意欲が強いため、制作をしながら自由に席を立てて互いに見合う形に切り替えた。用紙を取りに行くついでに友達の席に立ち寄りたり、思いや考えに行き詰まってみんなの席を見て回ったりする姿が見られた。A3やD2のように制作の過程で満足感を味わっている子供の作品が、行き詰っていたC1やD1に影響を与えていることが、感想からも分かる。自由に見たいときに見たい友達

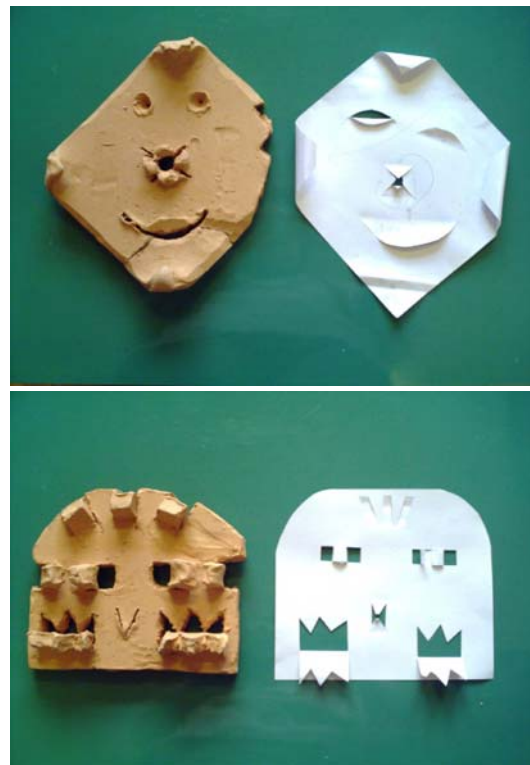
- ・最初はまゆ毛や鼻はどうしようかと思った。めくればいいと思ってそれでつくりました。(E2)
- ・今まで曲げたりねじったりあまりやることがなかったから難しかったけど、いい作品ができてよかった。(D2)

の作品を見ることは、制作意欲を高める上で効果的であった。また、G1やC3のように意見交換をしたときの友達の言葉によって自信をもつ子供も見られた。イメージ

のもてない子供が自信をもつために意見交換の場を設けたが、どの子供にとっても自信を深める場となり、ものづくりを通して自己肯定感を感じるという図工の授業の目標を達成することができた。

(イ) ものとのかわり

授業感想のD4・F4・E2・D2に見られるように、今まで使ったことのある画用紙に対しても制作上の条件を示すことで、新たな取組や気づきが生まれていることが分かる。今回は粘土で制作するための試作品としての画用紙だったため、はさみで切ったり糊でくっつけたりといった通常の活動ではない作業となった。そのため戸惑う子供も多かった。粘土の試作として画用紙が適切であったかどうかについては検討の必要はあるが、活動についての条件をどう設定するかが重要なINPUTとなっていることが分かる。鑑賞や表現方法を示すことはそのままINPUTとなることはもちろんのこと、素材の提示方法や取り組み方の条件によって子供たちの発想や制作意欲は大きく異なる。今までにできなかったことができたり、新しい表現方法を見付けたりすることで、子供たちは達成感や満足感を味わうことができる。子供たちがチャレンジしたくなるような題材や素材、条件を示すことの大切さを改めて感じた。



紙での試作品と粘土の顔

(2) 『アート？アート！』

ア 題材との出会わせ方 —授業改善①INPUTと模倣—

『アート？アート！』では、美術作品の鑑賞として人物や静物ではない抽象的な表現に触れさせたいと考えた。抽象的な表現の中でも、円の一部分や四角といった子供たちになじみのある形を組み合わせた平面構成の作品を取り上げる。今回INPUTとして選んだのは、フランク・ステラの作品の《フリン・フロンⅡ》と《バックホーフェンⅢ》の2点である。鑑賞作品にステラの作品を選んだのは次の理由からである。

- ①抽象的だが、分かりやすい形で構成されている。
- ②ステラは平面作品だけでなく半立体の作品も制作しており、紙で練習してから板を組み合わせるという本題材の進め方とマッチしている。
- ③「フリン・フロンⅡ」は愛知県美術館に常設展示されており、そのつもりになれば直接本物に触れることができるのは、大きな魅力である。

絵を描くことが苦手だと感じている子供にも、こんな表現の仕方もあるんだ、面白い絵もあるんだなと思わせ、制作意欲を高めたい。ステラの作品を鑑賞した後すぐに、三角形や円、四角形に切った色画用紙を組み合わせ、ステラをまねて作品をつくる時間をとる。初めて出会う抽象的な表現を目で見るだけでなく、実際に自分で行うことで、意欲だけでなく思いはぐくまれると考える。思いと表現力が影響し合う場を設け、子供たちの気持ちを次の題材『糸のこドライブ』へとつなげていく。

資料 10
《フリン・フロンⅡ》
フランク・ステラ作

資料 11
《ベック・ホーフェンⅢ》
フランク・ステラ作

中日新聞社 出版（展覧会カタログ）
「F l a n k S t e l l a」より

イ 思いをはぐくみ、表現力を高めるための支援

—授業改善②意見交換・かかわり合いの場の設定—

美術作品だけでなく友達作品も大切な「INPUT」の一つである。友達作品への取り組み方がヒントになり、そこから更に発想が広がる。友達作品をただ見るだけでなく、表現について意見を交換し合うことによって、作品づくりへのイメージがもてないでいた子供も自分の表現を試みようという気持ちが高まってくると考えた。そこで「INPUT」（鑑賞）と、「OUTPUT」（描く・つくる）の間に、意見交換の場を設けた。**制作の過程に「考える・感じ取る」（意見交換）というステップをつくることによって、制作意欲が高まり作品の質も高まると考える。**

『アート？アート！』は、まず第1次としてステラの作品を鑑賞する題材『ええっ？絵!?!』を行う。続いて行う第2次『糸のこドライブ』では、電動糸のこぎりで楽しみながら板の切断を体験し、その切断した板から発想を広げ、さらに、残りの板をいろいろな形のパーツに切断する。それぞれのパーツを黒いボードの上に組み合わせることで作品を完成させる。本時は、自分の板をまだすべて切り終わっていない段階に意見交換や作品を見合う場を設けることで、自分のつくりたいものに対するイメージを豊かにかつ確かなものにし、これからの制作に対する見通しをもたせるための授業である。

この段階で少人数のグループでパーツの組み合わせ方を試す活動を行う。ここでイメージの

資料 12		学習の流れ
次	時	主 な 学 習 内 容
第 1 次	1	<ul style="list-style-type: none"> 平面構成の作品を見て感想を話し合う。 静物画や人物画と平面構成の作品との違いを考える。 台紙にいろいろな形の紙切れをはり簡単な平面構成をする。
	2	<ul style="list-style-type: none"> 電動糸のこぎりの安全な扱い方を知る。 電動糸のこぎりで板を切る。
第 2 次	3	<ul style="list-style-type: none"> 電動糸のこぎりで切ったり、紙で試作したりして、構想を練る。 どんなパーツを切り出し、組み合わせるか考えながら板を切る。
	4	
	5	<ul style="list-style-type: none"> 前時のパーツをどう組み合わせると面白い作品ができるか考え、組み合わせ方を試す。 残りの板をどう切り、パーツをどう組み合わせるか見通しをもつ。
	6	<ul style="list-style-type: none"> 構想に沿って板を切る。 切った板を紙ヤスリで磨く。 出来上がったパーツに水彩絵の具で彩色し、ニスを塗る。
	7	
	8	<ul style="list-style-type: none"> 出来上がったパーツを組み合わせる黒いボードの上に置き、構成を確認する。
	9	<ul style="list-style-type: none"> 作品を見せ合い、それぞれの工夫したところやよいところなどを話し合う。 自分の制作を振り返る。

もてない子供は発想を広げるきっかけをつかむことができる。また、つくりたいイメージをもっている子供は、意見交換や作品を見合うことで更に発想を広げることにもできる。グループ活動を行う中でも自然にこんなこともできるあんなこともできる、という構想が広がっていくはずである。それらは実際に自分の作品に取り組むときに自分の形として表現されると確信している。本時以外にも作品に取り組む過程でうまくいかなかったり、行き詰まったりしたときには、友達作品を自由に見せたり、友達と自由に意見交換させたりすることで行き詰まりを解決させたい。

鑑賞や意見交換によって、子供たちは様々な表し方や見方に触れることができる。また、子供たちの表現意欲が高まり、想像力を働かせてつくりたいものを楽しんでつくることができると考える。なお、今回は完成した作品を10月に野外で行われる『とよた子ども造形フェスティバル』に展示するため、素材として板を選択したが、他のどの素材でも、どの題材でも、鑑賞と意見交換を取り入れた学習を計画することができる。このように表現活動に鑑賞と意見交換を組み入れることで、ものをつくるときに、どの子供も人からの評価だけにとらわれることなく、自分の制作を楽しみ、満足感を味わえるようにしていきたいと考えたからである。5年の子供たちには、今しか表現できない11歳なりの表現がある。大人目から見たよい作品を押しつけるのではなく、子供たちが満足感を味わえる造形活動でありたい。

ウ かかわり合いを分析することで子供の成長を見取る

(7) ものとのかかわり（題材との出会わせ方）—『ええっ？絵!?』（本題材の1／9）の実践—



児童の作品

フランク・ステラの《フリン・フロンⅡ》《ベックホーフエンⅢ》を順に見せ、それぞれについて感想を出し合うことから授業を始めた。まず子供たちから出た声は「絵に見えない!」というものだった。それぞれの作品について意見を出し合う中で《フリン・フロンⅡ》については、「同じ形が絵の中にある」「着物の帯のように重なって続いていく」「分度器をずらして色を変えていったみたい」《ベックホーフエンⅢ》については、「家の設計図みたい」「街」「なんだか立体的に見えてくる」といった意見が出された。《フリン・フロンⅡ》が分度器シリーズの作品であることや、ステラが自身の作品を「2.5次元的」と語っていることなど説明しなくても、子供たちは作品から作者の表したいものを感じ取ることができた。このINPUTは「たとえようのない独特の絵。ステラはユニークな絵を描いている」(児童B)「すごくカラフルで立体的」(児童E)「絵なのに立体的な形」(児童F)という言葉で日記に表された。見たものをそのまま表したりデフォルメしたりするのではない新しい表現方法に触れ、子供たちは形や色を意識し始めていることが感じられた。

鑑賞の後にいった約15分間の平面構成の練習では「ステラに挑戦するぞ」という声も聞かれた。出来上がった作品は黒板にステラの作品と並べて掲示した。授業感想には「ステラみたいにつくれないと思ったけど、やってみたら楽しかった」(児童G)「ステラにはかなわないかな?」(児童H)といったINPUTした新しい表現と自分の作品を重ねて考えようとする姿が見られた。

この後、板での制作に進んだとき、児童Hは「ステラに勝とうとすべて違う形をつくった」と日記に書いた。他にも「自分にしかない形をつくるのは難しいけど、楽しい」、「いろんな形が発見できた」といった記述も見られた。これらの日記からも分かるようにINPUTは子供たちの意欲を高めたり思いや構想を広げたりすることに効果的であった。

(イ) 人とのかわり (思いをはぐくみ、表現力を高めるための支援)

— 『アート?アート!』 (本題材の5/9)の実践—

ステラの作品を鑑賞した後、電動糸のこぎりの使い方を学習し、いよいよ本格的に『アート?アート!』の制作に入った。板をつくりたい形に切断する授業を1時間行った。子供たちは板をもっと切りたいという気持ちになっていたが、切る心地良さだけでなく切った形を組み合わせ、作品としていくことにも目を向けさせたい。そこで切り取った形を組み合わせる楽しさや、組合せによって表したものが変わってくる面白さを味わわせるために、グループで試作品を作る授業を行った。グループでの活動を通して友達の発想やものの見方に触れることも、INPUTであり、個々の作品に生かされると考える。

a 本時 (5/9) の指導計画

(a) 本時の目標

- ・意見交換を通して、更に板を切りたい、こんな形をつくりたいという意欲を高める。
- ・前時に切断したパーツを基に更に発想を広げ、パーツを組み合わせることを楽しむ。
- ・パーツの組合せ方によって作品のイメージが変わり、いろいろな作品ができることに気付く。
- ・友達との意見交換を通して色や形の効果に目を向け、自分の思いを見る人に伝えるためには色や形の工夫が大切であることに気付く。

資料 13 授業の進め方 (板書)

切り取ったパーツの置き方をためしてみよう

《条件》

時間	活動	ポイント
①5分	グループで置き方を考えよう	「ここを見てほしい!」という部分を最低一つはつくろう
②3分	他のグループを見てみよう	面白いところをたくさん見つけよう
③3分	題名を考えよう+バージョンアップ	「ここを見てほしい!」という部分について話せるようにしておこう

つくりたいもの⇄見る人がどう感じるか⇒色・形の工夫

(b) 手だて

- ・活動時間を区切ることで、活動目的を意識し、集中して取り組ませる。
- ・①～③の活動後に座席を教室の隅に寄せ、教室中央に広いスペースをつくる。そこにグループでつくった作品を置き、その周りに集まって意見交換をすることで、話しやすい雰囲気をつくる。



作品について意見交換

b 今までのINPUTが生かされている場面 —授業記録から—

ステラの鑑賞から時間がたっているが、思い起こすことができるように教室の背面にステラの作品と子供たちの平面構成の作品を掲示しておいた。初めは板を切ることに目が向いていたが、児童34のつぶやきをきっかけに平面構成と板を使った制作が結び付き始めた。このつぶやきで多くの子供が後ろを振り返り「ああ、あれだ」という雰囲気が学級全体に流れた。

資料 14 授業記録①

- 教師 31 「借りてまねっこしたんです。今日はみんなにも・・・」
- 児童 32 「やってください? みんなでこれはなの?」
- 教師 33 「たくさん用意してあるので、これをこうして・・・」(ボードにはってみせる)
- 児童 34 「あーあー。前なんかやったやつ・・・」

資料 15 授業記録②

教師 102 「じゃ2番目いくよ。作品じゃないものが載っていると困るので、作品以外のパーツはしまっ。床に置くと歩くから踏まれちゃうよ」

児童 103 「先生！見る向きって、適当？人によって違うからいいでしょ？見る向きによって違うものに見えるよ」

二つ目の活動の他のグループの作品を見合う場面では、教師から指示を出さなくても児童103のような発言が出された。4月から日記や授業感想の中から作品づくりに関する見方や考え方にかかわるものを、学級通信に載せるよう心掛けてきた。作品にはつくった人の思いや考えが詰まっていること、一人一人の思いも表現の仕方も違うこと、作品を見る人によって感じ方も異なることが、子供たちの中に根付いてきていることが分かる。

c 意見交換によるINPUTが行われている場面

(a) グループでの活動

一つ目の置き方を考える活動と三つ目の題名を考えて更に作品を工夫する活動は、グループで行った。8グループに分かれた子供たちの活動を、数名の教師で手分けして追った。授業後の分析で次の点が報告された。

- ・一人で作るのではないという安心感から、すぐに取り掛かることができた。また、セロテープで留めるだけなのですぐにやり直せることも、安心して取り組めることにつながった。
 - ・消極的でパーツの並び替えに手が出せなかった子も、友達の考えを聞き活動を見ることで、三つ目の活動や授業後に「ここをこうしたら、もっと波に見える」など、自分なりの思いをつぶやく姿が見られた。
 - ・一人で取り組むことに不安のある子は、一緒に活動したことによって安心して次のステップに進む自信がもてた。
 - ・形にこだわって「わかめみたいだから、黄色じゃなくて緑のがほしかったな」と言っていた子が、友達の「このわかめは、雷にもなるよ」という色から考えた言葉で、違う発想をもつことができた。
 - ・グループで取り組んだことによって、多面的に考えることができた。友達とかかわることで自分のイメージを広げることができた。
 - ・制作の途中で互いのつくったものを見合うことは刺激となった。そこから更によいものにしたという意識が高まった。
 - ・見た人が作品から受け取った感じや思いを話すことで、作り手の発想が更に広がった。
 - ・一つの作品を教室の中央に置き、全員で作品を取り囲むようにして意見交換したことによって、話しやすい雰囲気ができた。
- 最終的に作品をどうつくるかを考え、実際に

資料 16 授業記録③

教師 145 「ちょっと6班の作品を見る時間とろう。もう見た？はい、いくよ」

児童 146 「青いのが水たまりみたいで、その上に重なっているのが足みたいです」

(中略)

児童 150 「(水たまりと足は) 146 に似てて、これが太陽が差している感じ」

児童 151 「質問。『雨上がりの夜』なのになんで太陽が差してるの？」

(中略)

教師 153 「でもね、150はそう感じたんだよね」

児童 154 「黄色だと思ったから・・・」

児童 155 「黄色いのが電灯みたいなやつ」

(中略)

児童 158 「150の言ったこと、ここも(黄色ではない部分)太陽みたい。ここだけじゃなくて、ここも」

(中略)

教師 172 「では、つくった人の言葉を聞こうか」
(説明)

児童 176 「あたってたー!」(拍手が起こる)

児童 177 「ほとんどあってる。やった!」

作っていくのは個人の作業である。しかし、上記のことから分かるように、互いの思いやものの見方、作り方の技術や工夫について意見交換することは、子供たちの思いをはぐくみ考えを確かなものにする上で重要である。意見交換によって、多面的に考えることができるようになったり互いに刺激を与え合ったりできるだけでなく、制作に対する自信を育てる場にもなっている。自信をもって取り組むことができるからこそ、新しい発想が生まれたり新たな表現に挑戦したりする意欲がわいてくるのだと考える。この後の4時間は個人の制作となったが、それぞれが制作に集中する姿が見られた。

(b) 学級での意見交換



6班の作品 「雨上がりの夜に」

り取りが幾つも重なり、子供たちは協力して、作者の思いをイメージすることができた。作者の説明を受けた後、子供たちの中から自然に拍手が起こっている。これは、友達の思いを受け止め、理解することができた喜びの拍手であった。

本時は作品から受けるイメージをお話しながら意見交換が進んでいった。それは形や色から受けるイメージを基にしているので、本時の目指すところではあるが、題材の初めに取り組んだ平面構成の練習とは異なるものであった。それには二つの原因が考えられる。一つ目は、本時に教師が示したパーツが具象物（鯨や海草）を連想させるものだったことである。子供たちは、パーツを見たことのある具体物に見立てて物語を創作していた。抽象画のステラの作品から入ったのだから、抽象的な形を提示す

グループでの作品づくりを終えた後、全員で意見交換する場を設けた。より多くの友達と意見交換することで、気付くことも多くなると考えた。

児童150は、同じ感じ方をしている友達がいることによって発言したくなり、児童151の発言をきっかけになぜそう感じたのか（児童154の発言←150と同一人物）を考え始めた。さらに児童158の発言によって、黄色だから光といった色からのイメージだけではなく、上下に伸びる線という形からのイメージでも、伝えたいことを表すことができると気付くことができた。こうしたやり

資料17 授業記録④

- 教師 249 「そうそう。お話があったり、その作品の『テーマ』が。
そのテーマも、これがもしこの色だったら（水たまりの部分
を、青から同じ形の赤いパーツに変える）変わってくる」
- 児童 250 「あ！」
- 児童 251 「夕日」
(中略)
- 児童 253 「もしかしたら題名が変わるかもしれん」
- 教師 254 「そうだね。私たちはつくりたいテーマをもってやっているんだけど、これとこれでは（もう一度、水たまりの部分の赤と青のパーツを入れ替えて見せる）見た感じが・・・」
- 児童 255 「違う！」
- 教師 256 「違うね。今からつくる上で、テーマも大事。後は(板書『色』
『形』)色と形ね。同じものを太陽の光と言う人とワカメと言う人がいる」
(中略)
- 児童 259 「いろんな表現がある」
- 教師 260 「今からは、つくりたいテーマと色・形を意識してつくっていきこうね。今日はみんなでやったけど、次は一人ね」
(中略)
- 児童 263 「うわ、もう適当ではいかん！」
- 教師 264 「そう。もう適当ではいかんね」

べきであった。二つ目は、児童の発達段階を踏まえていなかったことである。鑑賞や制作の様子を見て、豊かな感性をもつ子供たちだからやや高度なレベルのこともこなせるのではないかと考え平面構成を取り入れた。しかし、平面構成に触れ楽しむことはできたが、それを生かして異なった素材で作品をつくることは、難しい様子だった。この二点については今後よりよいスタイルを検討する必要がある。色と形の効果については、意見交換の中で話題になったが、きちんと押さえておきたいと考えた。そこで、教師 249 で実際に作品の中のパーツを置き換え、子供たちに考えさせた。ただし、子供たちは形を何かに見立てて考えていたため、丸と三角から感じるイメージの違いといった「形のもつ効果」をここで話すことは適切でないと考えた。そのため色のもつ効果についてのみ確認するにとどまった。

形のもつ効果については次の時間に確認したが、事前の計画が十分ではなかった。本時を通して、見直しをもって制作するという意識（児童 263 の発言）が生まれたことは収穫であった。与えられた条件の中で個々につくるという経験の多い子供たちにとって、制作途中に試作品をつくったり友達と意見交換したりすることは、新鮮な経験であった。それは楽しく自信をもってつくるといふ喜びを味わうとともに、自分の思いを自分で形づくること、作者としての自分を意識することにもつながった。

3 成果と課題

(1) 成果

平成 17 年度・18 年度と、鑑賞と制作の題材を関連させたひとまとまりの題材として年間指導計画に組み込んで実践を行った。子供たちの思いをはぐくみ、表現力を高めるための手だてとして「INPUT」と「意見交換」を制作に取り入れるためにこういった形を取った。2年継続して実践を行って、子供たちの「できた」「うまいいった」という声があり、手ごたえを感じた。

ピカソやステラの作品の鑑賞を基に制作を行う中で「INPUT」や「意見交換」といった、ものや人とのかかわりの場を設けることで、新たな表現方法に触れることや同じものを見てもいろいろな感じ方があることを体験することができた。

自画像を描いてからピカソやガルガーリョの顔をモチーフにした作品に触れることで、顔に対する見方が広がった。そこで考えたり感じ取ったりしたことが、次の粘土での制作に影響を与えた。こうした活動を通して子供たちは、様々な表現方法があることに気付き、友達の作品に対しても「うまい」「きれい」だけではなく、作品のどこが良いかどんなふう面白いを見付けられるようになった。足りないと思う点についても具体的にアドバイスができるようになった。これらは、制作後の互いの作品の鑑賞で活用した作品カードに友達からの言葉として記され、つくった子供へと返された。互いの作品の鑑賞を終えた後、自分の作品カードに書かれた友達の意見を読む子供たちの表情は満足気であった。「こんなにたくさんの方が認めてくれた」「見てほしいところや頑張ったところを分かっ

資料 18 作品カード

てくれた」という言葉が出たり、休み時間に「さっきこんなこと書いてくれてたね」「こういうことが好きだったんだね」と声を掛け合ったりする姿も見られた。

子供たちが、できなかったことや失敗したという思いよりも、自分なりに頑張ったことや自分としてうまくいったことに目を向けて、自分の作品と向き合えるようになってきている。

多くの子供が、作品に取り組む中で自己肯定感を感じることできたと考える。それは、作品カードに書かれた「ここを見てほしい」という言葉からも感じ取れる。周りから褒められる作品を目指すのではなく、一人一人がつくることを楽しみ、その子らしい造形的な試みができた。子供たちの中に、一つの題材で評価されて終わりではなく「次はこうしよう」「こんなことがやってみたい」という思いが生まれている。鑑賞による「INPUT」によって「つくりたい」という子供たちの気持ちが高まり、制作途中での「INPUT」や「意見交換」によって表現するために必要な技術や方法が加わって思いを形にできることは、達成感を味わい、思いを更にはぐくんでいくと改めて実感できた。また、ものや人とのかかわらせ方を工夫することの大切さを実感することができた。

同じ題材を2年継続して実践したことで、具体的な手だてを分析し、評価することができた。

平成18年度実践の『顔・かお・カオ』では平成17年度の実践の反省を生かし、作品の提示方法を変えることと紙での試作の段階を取り入れることを行った。ピカソなどの3作品をOHCで提示することから、作品のカラーコピーをボードにはって、子供たちの目の前に示すことに変更したことで、子供たちの作品への集中力が増した。席を立ったり身を乗り出したりして作品を見る子供や、発言の中で実際に作品を指差して話す子供が多くなった。また、作品自体の色や質感も、OHCやプロジェクターでの提示よりもより本物に近い形で示すことができた。

(2) 課題

『顔・かお・カオ』での改善点 —試作に適した素材とは?—

平成17年度、鑑賞の後すぐに粘土での制作に入ったときの子供たちの戸惑いが大きかったため、平成18年度は紙での試作の段階を取り入れたのだが、実際の粘土は2cmの厚みがあり画用紙のように折り曲げることはできない。そのため紙での試作が粘土の制作で十分に生かされたとは言えなかった。中には紙での試作にとらわれ、ぐっと折り曲げたことでひび割れてしまった粘土を前に困っている子供も見られた。鑑賞の後で試作を行うことは、作品の幅を広げるために有効ではあるが、試作の素材として画用紙以外についても今後検討していく必要がある。

『アート?アート!』での改善点 —INPUTと制作をどう結び付けるか—

『アート?アート!』の実践では、抽象作品の鑑賞を行うことで子供たちに新しい表現方法を示すことができ効果的であった。絵や工作が苦手な子供も、円や三角形などを使った試作に楽しく取り組むことができ、面白い作品も数多く見られた。ただ、こうしたINPUTを『糸のこドライブ』での作品づくりに十分に生かし切ることができなかった。切ったパーツをどうしても具象物に見立て、黒いボードの上にお話づくりを行ってしまう子供も多く見られ、パーツの形の組合せや色で表現できた子供は全体の半数ほどであった。鑑賞と制作をどう結び付けるかは今後の課題である。『顔・かお・カオ』でデフォルメを取り上げたことと結び付けて、自由に平面構成を行うのではなく、ある程度パーツを切った後で、できたパーツを組み合わせて「○○な顔」をイメージするショートステップを設け

ることを考えている。「〇〇な」の部分に形容詞や形容動詞を当てはめ、その顔に込められた気持ちを考え、それに合った形や色を見付ける。「顔」という条件を付け加えることで具体的なイメージをもち、それをパーツの色や形に生かし、そのパーツを用いて平面構成させることで、鑑賞や試作のINPUTが制作に生かせるようにしたい。

以上のように、まだまだ改善する点が多い。しかし、今回「INPUT」と「意見交換」を手だてとした実践を行ってみて、図工の目標はただ表現力を伸ばすことだけではないと改めて感じた。確かにものをつくる力も大切である。しかし、美術作品に触れることや友達と意見交換や作品を見合うことで、ものの見方や色や形に対する感性が磨かれていく。この感性を磨くことが、そのまま表現力に結び付き、誰でも素晴らしい作品をつくれるようになるというわけではない。つまりINPUTしたことがそのままOUTPUTできるわけではない。けれども、まだ成長過程にある子供たちがいろいろな美術作品に出会い、友達のいろいろなものの見方や表現方法に触れることこそが大切なのである。出会った美術作品をまねしても同じように表現できないからこそ、その作品の偉大さや価値、意味に気付くことができる。INPUTされた美術作品や友達の作品と自分の作品との違いに気付くことができる。その中で友達のよさにも自分らしさにも目を向けることができるのではないだろうか。「INPUT」という形で「多くの表現に触れること」は、図工の目標の一つである豊かな情操を養うことへの重要な足掛かりであると言える。

おわりに

今回「授業改善に関する研究」に取り組むことで、改めて「どんな子供に育ててほしいのか」を自分自身に問うことができた。人とうまくかかわれずに、人の良くないところばかりをあげつらい、不満ばかりを口にする姿を、子供たちの中によく見掛ける。自分がどう見られているかばかり気になり、自信をもって行動できない姿もよく目にする。もっと「できた」「やった」と感じてほしい。自分のことが好きで、自信をもった子供であってほしい。そんな子供を育てるためには、図工は最も適した教科である。どの表現にもどんな感じ方にも、間違いはない。もちろんよりよい表現方法はあるが、巧みに表現できたものだけが優れているわけでもない。こうした考え方を授業の中に繰り返し取り入れていけば、自分の表現を肯定的にみられる子供たちが育つのではないだろうか。そしてそれは、思いをはぐくんだり、表現力を高めたりすることにつながり、ひいては図工で身に付かせたい力を伸ばすことに結び付いていくと考える。

この考えに基づいて実践してきた現在の子供たちは、図工の授業だけでなく多くの場面においても互いに考えたことを素直に話すことができる。間違っていることはだれであれ声を掛け合い、いつも失敗している友達に対しても、できたときには「やったね」「がんばったね」と認め合うことができる。この子には言えないとか、あの子はこういう子だから何をしてもだめな子だという先入観や力関係に縛られず、一人一人の違いやその時々の変化を受け入れて人と接することができるように成長しつつある。正しいと思うことを話し、間違っていたら素直に謝る。こうした安心して過ごせる場で新たな題材や課題に取り組むことは、更に子供たちの力を引き出していく。授業づくりは、そのまま「人間づくり」であると改めて感じた。だからこそ、私たちは日々、分かる授業、楽しい授業を目指していくのである。

実践1資料

第5学年1組 図画工作科学習指導案

1 日時 平成18年6月2日(金) 1・2時間目

2 題材 曲げて ねじって (本時 1・2 / 5)

3 目標

(1) 顔・かお・カオ (1時間)

- ・顔をモチーフにした作品を鑑賞し、様々な表現方法に触れ、そのよさや面白さを味わう。(鑑賞の能力)

(2) 粘土の自画像 (4時間)

- ・粘土の板を曲げたりねじったりしてできる形や空間の変化を楽しみながらつくる。(関心・意欲・態度)
- ・曲げたりねじったりしてできる形からつくりたいものを想像していく。(発想や構想の能力)
- ・粘土を曲げたりねじったりして表す方法を工夫する。(創造的な技能)
- ・友達のやり方を見ながら、自分の作品に生かす。(鑑賞の能力)

4 本時の指導

(1) 目標

《1時間目》

- ・自分の言葉で感じたことを発表できる。(関心・意欲・態度)
- ・顔をモチーフにした作品を鑑賞し、様々な表現方法に触れ、そのよさや面白さを味わう。(鑑賞の能力)

《2時間目》

- ・紙を使って意欲的に試作に取り組む。(関心・意欲・態度)
- ・紙を切ったり丸めたり折ったりして、構想を膨らませる。(発想や構想の能力)
- ・粘土と同じ大きさの紙を使って、曲げたりねじったりする方法を試す。(創造的な技能)

(2) 準備

教師→鑑賞作品①「顔」 パブロ・ピカソ作 ②「泣く女」 パブロ・ピカソ作
 ③「キキ・ド・モンパルナスのマスク」 パブロ・ガルガーリョ作
 (「自画像」1896年の作品 パブロ・ピカソ作) (若いころのピカソの写真)
 今日のおみやげ (授業感想のカード)

(3) 学習過程 (90分)

表中の☆は、抽出児の観察の視点

時間	学 習 過 程	教 師 の 支 援
5分	1 自画像を見て、顔の位置や形、バランスについて確認する。	・4月に描いた作品を見て、学習したことを思い起こすようにする。
35分	<p style="text-align: center;">いろいろな「顔」を見てみよう</p> <p>2 作品について感想を話し合う。</p> <p style="text-align: center;"> 作 品 (机をとり椅子だけで 作品に集まる) ○ ○ ○ ○ </p> <p>①「顔」パブロ・ピカソ作 について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目や鼻が大きい ・一つ一つの部分のバランスがおかしい ・顔の色が青い ・耳がない <p>②「泣く女」パブロ・ピカソ作 について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自画像をよく見て描いた中で見付けた位置やバランスを基に考えていけるよう、言葉掛けをする。 ・作者の思いまで話が進まない場合は、無理に問い掛けない。②の作品で作者の思いとデフォルメについて触れることができる。①では、バランスが崩れていてもきちんと顔に見えることを押さえておく。 ・ゲルニカの空爆に対するピカソの怒りと悲しみに、話し合いが向かうよう言葉掛けをし、ゲルニカ空爆の話を

	<ul style="list-style-type: none"> ・向きがおかしい ・正面なのか横を向いているのか分からない ・どこがどこか分からない ・仮面をかぶっている？ ・歯を食いしばっている ・泣いている ・なぜ泣いているのだろうか？ ・悔しそう ・閉じ込められた感じがする ・黒い服を着ている ・お葬式なのかもしれない <p>③「キキ・ド・モンパルナスのマスク」 パブロ・ガルガーリョ作 について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目が一つしかない ・鼻と口は半分しかない ・女の人が笑っている ・絵ではない。立体？ 	<p>することで、作者の思いをより強く表すためにこうした表現方法を用いていることに気付かせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・デフォルメという言葉についてもここで押さえる。ただめちやくちやに描くのではなく、目や歯、ハンカチを握り締める手などを強調することで、怒りや悔しさが表現されていること、不自然な色に気持ちの激しさが感じられることなども話す。 ・①と同じ作者であることから、ピカソがこうした絵ばかり描いていると考える子がいるかもしれない。そういう意見が出たときには、若いころの写実的な自画像とピカソの写真を示し、思いを伝えるための方法としてデフォルメを用いていることにも触れる。 ・絵から立体に視点を移すことで次の粘土制作への意欲を高める。 ・顔の一部分しか表現されていないことに対する不気味さを感じる子もいるかもしれない。人気モデルのキキの切れ長の目とあやしい微笑を単純化することで表現していることを話す。 ・強調するだけでなく省略して表してもよいことに気付かせる。
30分	<div style="border: 2px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">紙で試してみよう</div>	<ul style="list-style-type: none"> ☆抽出児H1 (感性が優れておりよい作品をつくることのできるが人とかわることが苦手)の発表や聞く様子について観察する。 ・油粘土で経験した、それぞれの部分をつくってくっつけていく方法とは違うアプローチの仕方を体験させたい。そのために、板状の粘土を材料として選んだ。昨年度は、鑑賞の後すぐに粘土での制作を行ったが、板状の粘土を顔の形に切り取る子供や粘土をちぎって目や鼻をくっつける子供が見られた。本年度は、鑑賞の後に紙で試作する段階を設けることで、鑑賞で学んだデフォルメを試す場とした。紙での試作を行うことで、発想を広げるとともに制作の方法に自信をもたせることもできる。
15分	<p>3 粘土と同じ大きさの紙で試作品をつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ねじると髪の毛ができそう ・切込みを入れて折ると、でっぱった感じになるよ ・丸めると顔の形や髪の毛の形に見える ・周りを切り取ったり、目や鼻をくっつけたりしなくても、顔に見える <p>4 試作品を見合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・切込みを入れてめくりあげるようにしてある ・縦長に切って、ねじるようにすると髪の毛が揺れているように見える ・四角やひし形でも顔に見える 	<ul style="list-style-type: none"> ☆抽出児D1 (発言ができ友達の作品のよさや面白さを見付けることができるが、制作において豊かな発想や丁寧さに欠けている)の制作の様子を観察する。 ・作品を近くで見合うため、話しやすい雰囲気をつくるために、少人数での意見交換を行う。その後クラス全体で意見交換を行う。
5分	<p>5 「今日のおみやげ」(授業感想のカード)を書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ☆H1の意見交換の様子を観察する。

		<ul style="list-style-type: none"> ・意見交換を行うことを通して、発想に行き詰っている子供や表現方法に自信がもてない子供が、次時の粘土での制作に対して見通しをもてるようにさせたい。 ・見たままを表すのとは違う表現方法もあることや次時の粘土での制作に対しての見通しや期待について書けるよう言葉掛けをする。 <p>☆D1が表現方法や発想についてや制作に対する見通しについて書いているか、H1が友達の発表や試作品から考えたことを書いているかを観察する。</p>
--	--	--

(4) 評価

《1時間目》

- ・それぞれの作品のよさや面白さを楽しみ、話すことができたか。(発言・話し合いの態度)
- ・顔という一つのテーマでも、様々な表現方法があることに気付くことができたか。

(発言・授業感想のカード・次時でつくる作品)

《2時間目》

- ・紙を使った試作品に意欲的に取り組み、いろいろな方法を試すことができたか。(制作の態度・試作品)
- ・試作品を制作することで、次の粘土での制作に対する見通しをもつことができたか。

(発言・授業感想のカード・次時の制作の様子)

- ・紙を折ったり曲げたりねじったりすることで、平面から顔の立体的な部分を表現する方法を見付けることができたか。(試作品・次時でつくる作品)

実践2資料

第5学年1組

図画工作科学習指導案

1 日時 平成17年9月12日(月) 5時間目

2 題材 アート?アート! (本時 5/9)

3 目標

(1) ええっ?絵!? (1時間)

- ・平面構成をモチーフにした作品鑑賞を通して、抽象的な美しさやよさに気付く。(鑑賞の能力)

(2) 糸のこドライブ (8時間)

- ・黒いボードの上に木のパーツを配置する活動を通して、組合せによる色や形の面白さを楽しむ。

(関心・意欲・態度)

- ・出来上がりの形を想像しながら、パーツの色や形を考える。(発想や構想の能力)

- ・電動糸のこぎりを安全に使いこなす。(創造的な技能)

- ・作品を互いに見せ合いながら、互いの表現のよさや違いを味わう。(鑑賞の能力)

4 本時の指導

(1) 目標

- ・自分の言葉で感じたことを発表できる。(関心・意欲・態度)

- ・意見交換を通して、更に板を切りたい、こんな形をつくりたいという意欲を高める。(関心・意欲・態度)

- ・前時に切断したパーツをもとに更に発想を広げ、パーツを組み合わせることを楽しむ。(関心・意欲・態度)

- ・パーツの組み合わせ方によって作品のイメージが変わり、いろいろな作品ができることに気付く。

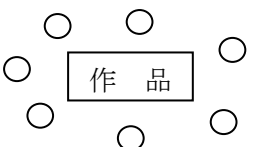
(発想や構想の能力)

・友達との意見交換を通して色や形の効果に目を向け、自分の思いを見る人に伝えるためには色や形の工夫が大切であることに気付く。(発想や構想の能力)

- (2) 準備 教師→カラーボードで作ったパーツの模型各種, 黒いボード, 試作品を載せる台, セロテープ
 児童→自分で切った板のパーツ

(3) 学習過程

表中の★は、伝え合う力を付けるための支援

時間	学 習 活 動	教 師 の 支 援
15 分	<p style="text-align: center;">切り取ったパーツの置きかたをためしてみよう</p> <p>1 前時に切り取ったパーツの模型を、黒いボードにどう置くか、グループで試す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電動糸のこぎりを使っている4～5人のグループで行う。 <p>《条件》</p> <p>(1) 時間</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 5分→グループで置き方を考えよう ② 3分→他のグループを見てみよう ③ 3分→題名を考えよう <p>(2) 活動のポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 5分→「ここを見てほしい!」という部分を最低一つはつくろう ② 3分→面白いところをたくさん見付けよう ③ 3分→「ここを見てほしい!」という部分について話せるようにしておこう <p>(3) その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パーツの模型は全部使っても残してもよい。 ・自分の切断したパーツを使ってもよい。 ・パーツはセロテープで仮留めをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に子供たちが切り取ったパーツの中で、面白い形を取り上げ、紹介しておく。それらの形を、模型で示すことで、黒いボードの上に模型を置いてパーツを組み合わせてみたいという意欲を高める。 ★少ない人数でパーツの組合せを行うことで、全員が意見を出しやすい雰囲気をつくる。 ・時間を区切って活動することで集中して取り組むようにさせる。 ・②の活動の時に動きやすいように、あらかじめ机を各班一つにし、他の机は教室から出しておく。椅子は全員分を机の周りに配置する。 ・模型の形は各班同じとするが、色の組合せは班ごとに変える。色によって見る人が受ける感じが違うことに目を向けさせたい。「ここを見てほしい」や「面白いところ」の話題として、色が出てくることをねらう。 ・③の活動の時に、グループでつくったものに題名を付けさせる。①で題名やテーマを考えてから取り組まないのは、制作する中で意見を出し合いながらイメージをもたせたいからである。 ・③の活動の時に、置き方を変えてもよいことにする。他のグループから学んだことや感じたことは、自分たちの作品に進んで取り入れさせる。 ・黒いボードの上にセロテープで仮留めをさせる。 ・模型や自分が切断したパーツではない形を使いたいという声が出たら、紙を切って必要なパーツをつくらせる。ただしこれは次時の課題のため、本時の条件としては説明しない。 ・互いに題名を聞くことで、関心を高める。 ・すべてのグループについて意見交換を行うことは時間的に無理なため、時間を見ながら2～4グループに絞って行う。 ・つくりたいイメージがはっきり伝わるグループと、イメ
25 分	<p>2 グループで考えた置き方について意見交換をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各グループの題名を発表する。 ・2～4グループの作品について意見交換を行う。 <div style="display: flex; justify-content: center; align-items: center; gap: 20px;"> <div style="text-align: center;">  <p>作品</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>作品の周りに集まる。いすは使わない。</p> </div> </div> <p>(1) 作品を中央の台に置き、題名を発表する。</p> <p>(2) 作品について全員で意見交換を行う。</p> <p>(3) 出された質問については、発表グループが答える。</p>	

<p>5分</p>	<p>(4)最後に発表グループが「ここを見てほしい！」と考えたところについて話す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(1)～(4)を繰り返し行う。 <p>(予想される意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボードからはみだしちゃったよ。 ・はみ出すのも面白いね。 ・ボードからはみ出すと、元気な感じがするね。 ・こんなに細いと折れちゃいそうだね。 ・小さいのばかりだと、何だか広がった感じにならないね。 ・重なってるよ。 ・重なるのも面白いね。 ・組み合わせ方で感じが変わるよ。 ・自分のは、どんな風にしていこうかなあ。 ・もっとこんな形のパーツをつくっておきたい。 <p>3 本時のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループでの制作やみんなとの意見交換で学んだことを、自分の作品に生かしていこう。 ・こんな組合せにしたいから、こういう形に板を切ろう。 ・色を考えて、きれいな組合せをつくろう。 ・自分のつくりたいという思いを見る人に伝えるためには、色や形の工夫が必要である。 	<p>ージをもてずにただパーツを置いていただけだったり、つくりたいイメージがうまく表現できていなかったりするグループ両方を選ぶようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ★中央の台に作品を置き、そこに全員が集まって意見交換を行う。全員が一つの作品を中心として向かい合うことで、意見を出しやすい雰囲気をつくる。 ★似ている意見をつなぐ形で話し合いを進める。 ★発表グループが作品について先に話してしまうと、見る人は作品について意見が出しにくくなる。自由に感じたことを話させるために、鑑賞の授業と同じように、まず作品を見て感じたことを話すようにさせる。 ・「ここを見てほしい！」が、見る人に伝わっていたグループは、形や色を使って自分たちの思いを表現できたことになる。この点を認め、子供たちに見る人の感じる感じについても意識させる。反対に伝わっていないグループは、なぜ伝わらないかを話題にすることで、次の活動に向けて意欲が高まるようにする。 ・【INPUT】(鑑賞)と【OUTPUT】(描く・つくる)の間に、意見交換を行う「考える・感じ取る」というステップを設けることで、制作意欲を高めると同時に作品の質も高めたい。 ・パーツが細くなると切り取りや彩色に多くの時間がかかること、ある程度の幅がないと壊れやすくなることを押さえておく。 ・パーツの組み合わせ方によって作品のイメージが変わることをとらえさせたい。そこから自分がこれから板を切って、どんな作品にしたいかに目を向けさせたい。 ・制作するとき、「自分のつくりたいもの」だけではなく、「見る人がどう感じるか」という点からも作品を見ていくとよりよい作品ができることに気付かせたい。
-----------	--	---

(4) 評価

- ・感じたことを自分の言葉で話すことができたか。(発言・話し合いの態度)
- ・いろいろな組合せを見たり、それについて意見交換をしたりすることで次の活動への意欲が高まったか。
(発言・話し合いの態度)
- ・パーツの模型を組み合わせたり、それについて意見交換したりすることで更に発想を広げることができたか。
(発言・話し合いの態度, グループで考えた組合せ)
- ・パーツの模型を組み合わせることで、いろいろな組合せがあり、違う形の作品ができることに気付くことができたか。(発言・話し合いの態度, グループで考えた組合せ)
- ・友達との意見交換を通して色や形の効果に目を向け、自分の思いを見る人に伝えるためには色や形の工夫が大切であることに気付くことができたか。(発言・話し合いの態度)